様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２８０４

研究課題名（和文）南北朝時代から隋代への礼学の変遷―礼学と実用のあいだ―

研究課題名（英文）Transition of rituals during Southern and Northern Dynasties period

研究代表者
池田　恭哉（IKEDA, YUKIYA）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：５０７０９２３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、実際の礼学者における礼の認識や、五礼・儀注といった礼認識が反映された儀礼とその編纂事業などに注目しながら、南北朝時代から隋にかけての礼学の変遷をたどることに意を注いだ。
　取り上げた礼学者の一人が、北朝の北斉・北周を生きた熊安生である。研究の過程で、彼の学術活動の中に五礼編纂の実績を見出すとともに、その学術的な成果が隋や唐にどのような影響を及ぼしたのかについても考察した。また南北朝時代の兄弟をめぐる議論を複数精読することで、当時の兄弟観と礼学の関係を検討し、同時にそこでの典故の継承の実態を探ることで、当時の学術の展開の様子についても、明らかにする部分が多くあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来の礼学研究は、礼に関する経典とその解釈（注釈）をめぐってなされ、五礼や儀注は末節としてあまり重視されてこなかった。本研究ではこれまで不明な点が多かった北朝における五礼編纂の過程を跡付け、それに携わった熊安生など、多くの学者による礼に対する認識について考察したことが、第一の学術的意義として挙げられる。また北朝から隋・唐へと経学の連続があることは、これまでにも言及があったが、それを礼学上の具体的な議論としてはっきりさせたことが、第二の学術的意義である。そして研究の中で、兄弟と礼という現代にも通用する問題点に着目することがあり、これは本研究をして社会的意義を具有せしめることとなった。

研究成果の概要（英文）：　This research focused on the understanding of rituals, such as "Wuli（五礼）" and "儀注（Yizhu）", by actual scholars, and traced the changes in the study of rituals from the period of the Northern and Southern Dynasties to the Sui Dynasty.
　One of the scholars that attracted my attention was "Xiong Ansheng（熊安生）", who lived in the Northern Qi and Northern Zhou. In his academic activities, I found his achievements in compiling the "Wuli（五礼）", and also examined how his academic achievements influenced the Sui and Tang dynasties. In addition, by carefully reading several discussions on brothers in the period of the Northern and Southern Dynasties, I examined the relationship between the view of brothers and rituals at that time. Accompanied by this study, the results of this research also clarified many aspects of the development of academic at the time.

研究分野：中国哲学

キーワード：五礼　儀注　徐遵明　熊安生　常徳志「兄弟論」　顔之推『顔氏家訓』兄弟篇　典故（「分形同気」「無徳而称」）　王通『中説』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「礼学」とは、中国思想の核心たる「礼」をめぐる学問である。その豊穣な研究史は、多くが「三礼」（『周礼』『儀礼』『礼記』の経書）を対象に、三文献の成立年代、思想内容、解釈史（注釈史）などの考察を課題としてきた。特に解釈史では、後漢の鄭玄と三国魏の王肅が構築した経書解釈の体系および個々の学説、そしてその両者間での対立、さらにそれらの同時代や後世の礼学者による消化、これらの様相の探究こそが中心であった。

こうした経書解釈の問題は、「礼」を実際に運用する場面（祭祀や葬儀などの儀礼・儀式）と深く関わる。経書の記載内容の解釈次第で、経書が記す「礼」に即して執り行われる儀礼・儀式の内容も異なってくるからである。このため儀礼・儀式をめぐっては、思想史の分野では経書解釈上の学説の対立と受容、歴史学の分野では文献資料に記された制度上の問題と、それぞれ重点こそ異なるものの、様々な研究が展開されてきた。

だがここで本研究は、三つの課題を見出す。①経書や礼典など「礼」文献上の制度（理念）と、実際の礼の場面（儀礼・儀式）における礼の運用の間には、しばしば乖離が存在し、その乖離を埋めるものとしての「学説」の意義に注意が必要であること。②上記の第一の課題から、学説そのものとは別に、その学説を採用して実際の儀礼・儀式に運用する際の礼学者の意識や思想に対する考察が必要であること。③時代的に後漢から魏晋時代、唐代が取り上げられる一方、その間に位置し、両時代を橋渡しする南北朝時代から隋代における「礼学」の変遷を研究対象とする必要があること。

以上の課題認識から、本研究では次の問いを設定した。すなわち魏晋時代を承け唐代を啓く南北朝時代から隋代において、礼学者たちは「礼」をどのように解釈し、しかもその解釈を如何なる認識の下に実際の儀礼・儀式に投影し、運用していったのか、というものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、大きく次のように二分される。第一は、「礼」解釈とその儀礼・儀式への運用の実態を検証し、そこに投影された礼学者たちの「礼」への認識を探ること。これは「礼」が社会の中で如何なる意義を持つと考えられていたのかを焙り出すであろう。第二は、中国が南北に分断していた南北朝時代における「礼」への認識が、隋代に統一される過程でどう継承され、また如何なる変容を被ったのかを整理すること。これは南北朝時代から隋代にかけての「礼学」の変遷を、初唐までをも視野に明らかにするであろう。

３．研究の方法

上述したように、本研究の第一の目的は、礼解釈とその儀礼・儀式への反映を探ることであり、そのためには五礼（実際の国家儀礼での礼の運用を、内容面から吉・凶・賓・軍・嘉の五つに区分した礼規定）や儀注（実際の儀礼・儀式の式次第）に着目したい。具体的な方法としては、まず南北朝時代から隋代における五礼や儀注の編纂、整理の具体例を一つ一つ洗い出す。その上で、当時それら五礼や儀注の編纂、整理に携わった礼学者たちが、そこにどのような礼解釈を盛り込み、またその営みに対して如何なる意義を見出したのかを、学者たちの発言や行動を丁寧にたどることで、検証していく。

また南北朝時代に限らず、五礼や儀注に見える礼解釈は、礼学者の議論を経て実際の国家儀礼に反映された。だが南北朝時代に特有なのは、王朝が短期間の内に乱立し、かつ王朝ごとに独自の礼解釈に基づく五礼や儀注が取り決められたため、ある王朝で活躍した学者が別の王朝に遷った際などに、礼解釈上の衝突が多く起こったことである。そこで本研究では、複数の王朝で礼の議論を展開した学者を取り上げ、彼らの「礼」の議論とその根拠を精査しながら、別の王朝での礼解釈上の相違が原因で生じた論争などを事例に、礼学者が抱えた礼学という営みの困難について、考察していきたい。

そして上記の衝突が最大規模で起こったのは、隋という統一王朝の出現時であった。隋の南北朝統一に伴い、南北両朝でまったく異なる学術体系に属していた学者たちたが、一堂に会して隋朝の礼学を築いていく必要があった。ただ各学者が強固に自説を主張したために、なかなか統一的な見解を得られなかったのである。この点について、隋だけではなく初唐をも見据える形で、どのように前代の南北朝時代における礼解釈が消化、吸収されたのかを、実際の各種議論に即しながら探究していく。

４．研究成果

まず礼学者による礼認識に関する研究成果として、川原秀城編『漢学とは何か：漢唐および清中後期の学術世界』（勉誠出版、2020 年）に所収の「北朝の学問と徐遵明」を挙げる。徐遵明は北朝を代表する学者であるが、本稿によってその学問形成の過程と、彼が北朝の学問に対して果たした指導者的な役割が明らかになった。特に彼が北魏にあって大規模な学団を率い、礼学を中心とする経学の分野で多くの後進を育成し、それが北斉、北周、さらには隋の礼学（経学）にまで大きな影響を及ぼしたとの指摘は、従来あまり取り上げられてこなかった北朝の経学史に対し、画期的な見取り図を提示したものである。なお本成果については、「『漢学とは何か』の紹介

と展望」と題して、第７回アジア史連絡会（2020 年 12 月 13 日、オンライン開催）において、内容の紹介と今後の自身の研究の展望に関する口頭発表を行った。

そしてこの徐遵明の高弟である熊安生を扱ったのが、「熊安生伝」(『京都大学文学部研究紀要』第 62 号、2023 年）である。熊安生は生涯のほとんどを北魏から北斉に暮らし、徐遵明の学団にも在籍した経験を持つ礼学者であったが、最晩年には請われて北周に身を遷した。彼は北斉にいた時分、礼学に関する学殖を買われて五礼の編纂に携わっていたが、『周書』の本伝にはその事実がまったく記されていない。本稿では各種史書の博捜によってその事績を発見するとともに、熊安生と五礼の編纂に協働した人物の名と、彼らの礼学の実態を詳らかにすることに成功した。加えて北周が熊安生を招聘した背景に、彼の『周礼』に関する学識への高評価があったことも指摘した。本稿によって、これまで漠然と北朝としてひとまとまりに考えられていた北魏・北斉・北周という王朝に対し、儒学という観点から個別な形で省察を加え、それぞれの特徴を見出すことに成功した。

また徐遵明の場合と同様、熊安生の学問の後世への影響についても、多角的に検討した。熊安生の学問は、特に礼学の面で後世の学者による受容があったが、その影響力について、初唐の『五経正義』など儒教文献だけではなく、仏教文献にまで目を配って実証した。本成果は、経学・礼学の営みの展開を北朝から隋、そして初唐へという長期的な時間軸の中たどる研究の出現に向けて、重要な第一歩となったと言えよう。

さて北朝の経学・礼学を考える上で最も重要な王朝と言ってもいいのが、北斉である。その王朝史『北斉書』を、抄訳ながら本邦で初めて現代日本語訳にした成果が、氣賀澤保規監訳、池田恭哉ほか訳『中国史書入門　現代語訳　北斉書』（勉誠出版、2021 年）であり、公刊直後より専門家のみならず、一般の読書界からも好評を博している。翻訳を担当した列伝の中でも、顔之推の伝は特に重要である。顔之推は南朝梁で生まれ、侯景の乱を経て北朝の北周・北斉を転々とし、隋にまで生きたという波乱の人生を送ったが、その伝に採録されている彼が晩年に生涯を振り返った自伝的な賦「観我生の賦」が訳出されたことで、そこに語られる各王朝・時代の学問に対する顔之推の認識を、今後は探ることが目指される。また複数担当したコラムの内、「文林館・『修文殿御覧』」は、北斉の文化事業の基礎的な内容をまとめたものであり、今後の北斉文化に関する考察の土台を成す。

以上は当初の研究の目的に沿った形での研究成果であるが、北朝から隋における礼学に関する文献を読んでいる過程で、いくつか予期していなかった気付きがあった。それが当時の兄弟観をめぐる発言についての気付きである。

その一つとして、隋・常徳志「兄弟論」を挙げる。この文章は従来あまり注目を浴びることはなかったが、王朝の安定しない南北朝時代から隋という時代を生きる上で、兄弟関係のあり方が如何に大事であるかを、様々な経書を根拠にして口を極めて主張しており、当時の学者の経学に対する取り組みを多面的に考察する上で、非常に重要なものであると考えるに至った。そこでこれを精読し、「常徳志「兄弟論」訳注（上）」(『香川大学国文研究』第 47 号、2022 年）として公表した。下編も執筆中で公表の目処がついているし、「隋・常徳志「兄弟論」の訳注を作成して」（第１０回アジア史連絡会、2022 年 6 月 25 日、於龍谷大学）は、本文章の基本的な性格を紹介した口頭発表である。今後はこの精読の成果を、同時代の兄弟観が反映された文章との対比などを取り入れることで、より深化させていくことを目指したい。

また常徳志「兄弟論」は、兄弟を「分形同気」、つまり同じ親から肉体は別々のものを授かりながら、気としては同質のものを保有した存在であると、定義づける。この発想自体は古く『呂氏春秋』精通篇に典拠を持つが、常徳志と同時代の顔之推もその著『顔氏家訓』兄弟篇でこの発想に言及するなど、当時の兄弟観を考える上で、「分形同気」という概念が重要である。そこでこの「分形同気」という言葉が指す内容の変遷を、『呂氏春秋』から、この語を宗室の兄弟に用いるきっかけを作った三国魏の曹植、さらに南北朝時代の皇族や顔之推・常徳志と、諸例を幅広く検討することで、口頭発表「典故的形成与其用法―「分形同気」為例―」（中古中国制度・礼儀与精神生活　国際学術研討会、2021 年 8 月 22 日、中国語、オンライン）を行うとともに、「典故の形成とその用法―「分形同気」を例に―」(『香川大学国文研究』第 46 号、2021 年）という論文の形にまとめた。

兄弟関係は、親子関係や君臣関係などと並んで、重要な人間関係の一形態であろうが、これまであまり十分な検討がなされていないように思われる。一方で三国から南北朝時代には、王朝での宗室内部での兄弟同士による抗争なども頻見され、兄弟観の変遷を見直すことは重要な課題であるため、今後も留意していきたい。

以上に加え、『中国史書入門　現代語訳　北斉書』の翻訳作業の過程で出会った「無徳而称」という表現について、その用法の変遷をたどったのが「「無徳而称」について－表現形式の成立とその展開をめぐって－」(『京都大学文学部紀要』第 60 号、2021 年）である。ある表現の用法の変遷をたどるという本稿の視座は、「分形同気」を取り上げた上述の成果と重なり合い、本稿によって南北朝時代における知識伝播の様相の一端が明らかになった。また連載を続けてきた隋の大儒・王通の著作『中説』の訳注も、本研究既刊内に『香川大学教育学部研究報告』第４・６・８号に「王通『中説』訳注稿」のそれぞれ（七）（八）（九）として刊行した（2021,22,23 年）。この一連の訳注を通じて、隋における儒学界の抱えた課題や、共通して話題にされた思想上のテーマなどが浮き彫りになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 池田恭哉	４．巻 47
２．論文標題 常徳志「兄弟論」訳注（上）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 香川大学国文研究	６．最初と最後の頁 76-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田恭哉	４．巻 62
２．論文標題 熊安生伝	５．発行年 2023年
３．雑誌名 京都大学文学部研究紀要	６．最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池田恭哉	４．巻 8
２．論文標題 王通『中説』訳注稿（九）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 香川大学教育学部研究報告	６．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池田恭哉	４．巻 46
２．論文標題 典故の形成とその用法―「分形同気」を例に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 香川大学国文研究	６．最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池田恭哉	4．巻 6
2．論文標題 王通『中説』訳注稿（八）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 池田恭哉	4．巻 4
2．論文標題 王通『中説』訳注稿（七）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 池田恭哉	4．巻 60
2．論文標題 「無徳而称」について－表現形式の成立とその展開をめぐって－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6．最初と最後の頁 25-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 池田恭哉
2．発表標題 隋・常徳志「兄弟論」の訳注を作成して
3．学会等名 第10回アジア史連絡会
4．発表年 2022年

１．発表者名 池田恭哉
２．発表標題 書評『アジア遊学 277 宋代とは何か』
３．学会等名 第254回宋代史談話会
４．発表年 2023年

１．発表者名 池田恭哉
２．発表標題 典故的形成与其用法―「分形同気」為例―（中国語）
３．学会等名 中古中国制度・礼儀与精神生活 国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 池田恭哉
２．発表標題 典故的形成与其用法ー以“桓山之悲”為例（中国語）
３．学会等名 “古典学的重建：出土文献与早期中国経典研究” 視訊国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 池田恭哉
２．発表標題 『漢学とは何か』の紹介と展望
３．学会等名 第7回アジア史連絡会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

1．著者名 氣賀澤保規、池田恭哉、岡部毅史、梶山智史、倉本尚徳、田熊敬之	4．発行年 2021年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 680
3．書名 中国史書入門　現代語訳　北斉書	

1．著者名 川原秀城編（池田恭哉・分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 256
3．書名 漢学とは何か（担当「北朝の学問と徐遵明」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関